

歴史と環境：歴史地理学の可能性を探る

溝口, 常俊
名古屋大学大学院環境学研究科：教授

阿部, 康久
九州大学大学院比較社会文化研究院社会情報部門：准教授

<https://hdl.handle.net/2324/1398514>

出版情報：2012-12-20. 花書院
バージョン：
権利関係：

まえがき

本書は本来、溝口先生が2013年3月に名古屋大学大学院環境学研究科教授を御退任されることにあわせて、溝口先生の名古屋大学教授時代の指導学生による退任記念論文集を刊行したいという目的で企画されたものである。

もとより溝口先生は、名古屋大学助手時代及び富山大学時代にも多くの学生を指導されており、現在研究者として活躍されている方も多くおられるのだが、本書は諸般の事情により、1996年10月に名古屋大学教授として着任されて以降に大学院等にて指導を受けた方と溝口先生御自身に執筆を依頼し、御寄稿頂いた15編の論文を基に刊行した。執筆依頼の際に御協力を賜った名古屋大学助教（当時）の阿部亮吾氏に謝意を表するとともに、依頼することができなかった方々にはお詫び申し上げたい。

本書のタイトルであるが、主題の『歴史と環境』については、執筆者から原稿を募る前に編者らが決めたのであるが、副題の『歴史地理学の可能性を探る』については、実際に御寄稿頂いた原稿のタイトルを見て、副題として適切なものであると考え確定したものである。

一般に、本書のような教員の退任記念という趣旨の論文集の場合、執筆する論文の内容は各章の筆者に委ねられることも多いようである。本書の場合も、各執筆者に論文の寄稿を呼びかけた際には『『歴史と環境』というタイトルに少しでも関係がある内容であれば、どのような内容でもよい』という条件で執筆者を募っている。

名古屋大学地理学講座の特色として、修了生の研究分野が多岐に渡っている点が挙げられる。そのため編者としては、一冊の編書としての内容の統一性については、ある程度は目をつぶるつもりで、この本の企画を進めてみたわけだが、実際に御寄稿頂いた原稿のタイトルを見ると、予想以上に書名に即した内容の原稿が集まったという印象を持った。

繰り返しになるが、各執筆者は地理学の多様な分野を専門としているし、本書の執筆者をみても、実際に溝口先生の御専門である近世期を研究していた元指導学生は村田氏のみである（近代期を対象としていた指導学生は多いのだが）、しかしながら各執筆者の研究と原稿の内容は、溝口先生の御指導の下、歴史地理学の視点と研究手法から一定の影響を受けているといえる。

各章の内容が、編者が予想していたよりは全体との統一性が取れたのも、

溝口先生の大学院時代での教育活動の賜物であるといえよう。そのため本書の内容を取りまとめるに当たっては、一部に原稿提出の遅延（あるいは執筆辞退）がみられた以外は、極めて順調に作業を進めることができた。

以下で述べる内容は、溝口先生や他の執筆者の研究・教育内容や意図とは必ずしも一致しないかも知れないが、地理学研究において「歴史的側面」を扱うことの意味について、編者なりに整理したものである。

人文地理学という学問の成り立ちを考えれば、元来、その中心的な研究テーマは自然環境と人間活動の関わりについて研究することにあつたといえよう。しかしながら、現代社会においては、社会の発展にともない自然環境が人間活動に直接的な影響を与える度合いは低下していることも事実であり、むしろ自然条件を所与のものとししない人文現象の空間的側面について検討する研究も大きな影響力を持っている（例えば山本（2005, p.5-9）の整理を参照）。しかしながら、自然環境が人間活動に対して直接的に影響を与えないような事例を研究する場合でも、多くの人文地理学者は、研究対象とする地域が有する歴史的背景を重視している。このような歴史的側面を無視して、現象を過度に一般化・抽象化することは、現在の人文地理学研究においても忌避する研究者は多いといえる（辻編2000, pp.19-22）。そして、このような歴史的側面の背景には、本来は自然環境の影響も存在していた場合も多いのである。

そのため、現代の人文地理学研究においては、自然環境と人間活動をつなぐ要因として、「歴史的要因」を検討することが、より重要視されているといえる。例えば、編者自身が本書で研究対象とした中国東北地方の製鉄業の場合、この地域が改革開放政策以前には中国有数の製鉄業地域であった要因の1つとして、製鉄用燃料である石炭の産地であったという自然条件もある程度は作用していたといえる。そして、このような自然条件に由来する歴史的背景は、現在においても既存企業による事業の継続という形で当該地域における製鉄業の立地に影響を与えていると解釈できる。

もちろん、このような議論は現在の地理学においては環境可能論という用語で表現されており、特に編者が新しいことを指摘しているわけではない。それにもかかわらず、このような議論に言及した理由は、編者自身、大学院時代の授業やその他の機会に、このような点をあまり真面目に議論した記憶はなく、それにもかかわらず同窓生である各執筆者は、以上の点がある程度（意識的かあるいは無意識的なものなのかまでは分からない）踏まえて原稿

を執筆・寄稿している点に興味を覚えたからである。すなわち、個々の研究者はそれぞれ多様な研究テーマを専門としてはいるものの、何らかの形で学風あるいはカルチャーとでも呼べるようなものを共有していることを指摘したかったからである。

以上の点を踏まえて、本書は次の3部から構成されている。

第1部 自然環境と人間活動

第2部 歴史と社会環境

第3部 社会環境と経済活動

すなわち、第1部には地理学の伝統的なテーマである自然環境と人間活動の関わりについて検討した諸論文が収められている。第2部には自然環境の影響も含めた地域の歴史的な背景について検討した諸論文が収められている。このような歴史的背景は人文現象の背景となる社会的諸条件（これを本稿では社会環境と呼んでいる）を構成する重要な要素になっていると編者は考えている。第3部では、このような社会環境を踏まえた上で、地域の経済活動を分析した諸論文が収められている。地理学者が経済活動を対象として研究を行う際には、これらの論考で見られるように対象地域が有する歴史的・社会的背景を考慮することが欠かせないという点は、本書においても指摘しておきたい点である。

これに加えて、溝口先生より本書のタイトルにちなんで、今後の研究の構想を「地域環境史」という概念を用いて御紹介して下さった原稿も御寄稿頂いたため、最終章に掲載した。

末筆になるが、本書の刊行に際して、溝口先生を始めとするとする名古屋大学の先生方・諸先輩・学兄方に加えて、以下の方々から大きな影響を受けたことも記しておきたい。まず編者が本書のタイトルと構成を考えた際に参考にした書籍として、2004年4月から2006年3月まで助手として在職した九州大学人文科学研究院（現在の職場である比較社会文化研究院とは別の組織なので、決して手前味噌で書いているわけではない）の先生でいらした野澤秀樹先生の『ヴィダル＝ド＝ラ＝ブラーシュ研究』が第一に挙げられる。恥ずかしい話であるが、編者は同大学に赴任するまでは、元来の不勉強に加えて、目先の研究業績を増やすことに汲々としていたため、自分が依拠している人文地理学という学問分野の成り立ちや特性について、まともに考えたこ

とがなかった。同大学に助手として赴任させて頂いたことは、この点について、それまでとは違った立場から考えるきっかけとなった。野澤先生御自身は編者と入れ替わりで九州大学を定年退職されたのだが、時折、地理学研究室に顔を出されることもあり、興味深いお話を聞かせて頂くことができた。そして何より、同研究室の高木彰彦先生・遠城明雄先生を初めとする先生方や学生らとの授業や勉強会での交流を通して、人文地理学とは何なのかを改めて考えることができたのは、編者にとって貴重な経験であった。

また本書の刊行に際しては、出版を引き受けて下さった花書院の仲西佳文代表取締役にも多大な御厚誼を賜った。教員の退任記念論集という一般的には出版社に敬遠されるカテゴリーの書籍を、破格の価格で出版して下さいたことには、適切な御礼の表現をみつけれないほどである。

この他にも、すべての方々の御名前を挙げることはできないが、本書の刊行に際しては、多くの方々から御厚誼や研究上の示唆を受けている。この場を借りて心より御礼申し上げます。

阿部 康久

文献

- 辻 悟一編2000. 『経済地理学を学ぶ人のために』世界思想社.
野澤秀樹1988. 『ヴィダル＝ド＝ラ＝ブラーシュ研究』地人書房.
山本健児2005. 『経済地理学入門 新版』原書房.